

新しい扉



か

ドドンッと大きな音が響き、雪囲いをした窓ガラスが振動する。屋根に積もった雪が一気になだれ落ちたのだ。昭和村での3度目の冬は、豪雪地の村でもことさら雪が多かった。

からむしの繊維を使ったランプシェードの注文がノートにびっしり埋まっていたが、これ以上作り続ける体力も気力もなく、悩んだ末に、届けられないことを手紙で詫びた。多くの人からいただいた応援に応えられなかったことが申し訳なく、情けなかった。

織姫の頃に引いたからむしの原麻を眺めながら、ふと思った。最初に戻ればいいんじゃないか。初めてからむしに出会ったときの畏れや憧れがよみがえる。もう一度、ゆっくりと糸を績もう。何かを成すためではなく、ただただ糸を績む時間の中に帰ろう。そう思うと心の底からほっとして、からむしがあればなんとかなる、という気持ちになれた。

その気持ちを伝えた人と結婚することになるとうちは、考えてもみなかったことであり、両親はもちろん、友人たちにも驚かれた。その年の春、私は3年間お世話になった昭和村を離れ、夫の生まれ育った三島町の住人となった。

「結婚前にもっと一緒にいろいろ話したかったし、結婚の支度もしたかった」と、のちに母に言われたとき、その気持ちに気づけなかったことを悔いた。中学から親元を離れ、ほとんど実家で暮らすことなく、こんなに遠くまで来てしまった。結婚後はこれまでのように自由に動けるわけではなく、両親の老いが進むにつれ、もっと近かったらと思うこともたびたびあった。せめて結婚前の時間を父と母の家でゆっくり過ごせばよかったと、今更ながらに思う。

村の若い女性は「ずっと一人で頑張っただけなのに」と、冗談とも本気ともつかない言葉で祝福してくれた。織姫制度の当初の条件「35歳まで」の真意は、結婚して定住することも視野に入れてのことだったのだと思う。

昭和村から贈られたからむしの美しい原麻は、ふるさとになってくれた村の思い出として今も大切にあってある。昭和村と三島町、奥会津のふたつの地域が、このご縁を結んでくれた。

人生には思わぬことが起こる。原点に帰ろうと思ったとたん、新しい扉が開いたのだ。